この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

初めて身体を重ねたあと、里桜は帰っていった。

初体験の余韻のせいだろうか。普段はよく喋る彼女も、照れくさいのか、いつもよりずっと口数が少なかった。

玄関で彼女を見送ると、俺は自室へ戻る。

部屋には、まだ里桜の残り香が漂っていた。

ベッドのシーツは、さっきまでの出来事を物語るように、いつも以上にくしゃくしゃに乱れている。

俺はベッドの前で深呼吸した。

俺は変態じゃない。
俺は変態じゃない。
俺は変態じゃない。

そう自分に言い聞かせながら、シーツへ顔を埋める。

ふわりと漂う、甘酸っぱい香り。

里桜の匂いだ。

さっき出したばかりなのに、また股間が熱を帯び始める。

……これじゃ、本当に変態じゃないか。

思わず自分でツッコミを入れる。

だが、止められない。

里桜の香りだけで、身体の奥から欲望が湧き上がってくる。

本当は二回戦だってしたかった。

そんな未練を振り切るように、俺は机へ向かい、パソコンの電源を入れた。

起動するまでの時間が、やけに長く感じる。

画面を立ち上げても、頭の中から離れないのは今日の記憶だった。

柔らかく、温かく、照れながら微笑む里桜。

初めて触れ合った感触。

初めて重なった温もり。

何度思い返しても、胸の鼓動は静まらない。

やがて余韻が落ち着くと、俺は椅子にもたれ、静かに目を閉じた。

頭の中は、まだ里桜でいっぱいだった。

小学生の頃から知っている相手だからだろうか。

初めは何も意識していなかった。

小学校六年間で何度同じクラスになったかさえ覚えていない。

顔なじみになったのは、中学生になってからだ。

登下校の道が途中まで同じだった。

最初は、お互い無言ですれ違うだけだった。

やがて会釈を交わすようになり、ある日、里桜のほうから話しかけてきた。

そこから少しずつ距離が縮まり、気づけば恋人同士になっていた。

そして昨日。

俺は彼女から、一生忘れられない誕生日プレゼントをもらった。

翌日。

昼間は両親が仕事で家にいない。

チャイムが鳴り、玄関へ向かう。

「今日も暑いねぇ」

里桜はハンカチで汗を拭いながら微笑んだ。

「里桜」

「ん？」

「今日はシャワー浴びていきなよ」

一瞬だけ目を丸くしたあと、彼女は静かに頷いた。

「……うん」

その返事だけで、俺の言いたいことを理解してくれたのが分かった。

靴を脱ぎ、ゆっくりと家へ上がる。

「じゃあ、俺は部屋で待ってる。焦らなくていいから」

冷えた麦茶を用意しながら、俺は二階の自室へ戻った。

しばらくして、里桜が部屋へ入ってくる。

服装は来たときのまま。

けれど、頬だけはさっきよりもずっと赤かった。

「麦茶飲みなよ。熱中症になるよ」

「うん……」

半分ほど飲み終えたところで、俺は何気なく尋ねる。

「里桜、宿題は持ってきた？」

「えっ……あっ……持ってきてない」

慌てる彼女を見て、思わず笑みがこぼれる。

今日、俺が何を考えているのか。

彼女はちゃんと分かってくれていた。

少し照れながら向かい合う二人。

昨日とは違う距離感。

恋人として、身体だけでなく、お互いのことをもっと知りたい。

そんな想いを胸に、俺は一つだけ、昨日からずっと考えていたお願いを切り出そうとしていた。

その願いに、里桜はどんな顔をするのだろうか。

◇　◇　◇

この続きは本編でお楽しみください。